

## 海外ボランティア活動報告書

8月25日から9月9日までの2週間、インドのコルカタ、マザーハウスにてボランティアを行ったことをここに報告する。

### 動機

卒業論文をインドの貧困問題について執筆予定であった。その際、文献を読んでも貧困が一体何なのか実感がわからず、自分の目で見て現状を把握することにした。旅行では観光に終わり、生活を身近に感じられないと思った。ボランティアであれば、貧しい人々の生活を目の当たりに出来ると考えた。

### 活動場所

マザーテレサが1955年から30年間に渡り開設した施設の中の3か所でボランティア活動を行った。施設はプレム・ダン、ダヤ・ダン、カリガートである。

### 施設詳細・活動内容

#### プレム・ダン

この施設には貧しく、瀕死の状態の患者が男性約80名、女性約50名収容されている。主に結核、肺炎、脳膜炎、マラリア、ハンディーキャップ等を持つ患者である。身寄りの無い高齢者や貧しく医者にかかれぬ患者もいる。中には知的障害のため家族に捨てられた人も収容されている。

ここでの活動は、洗濯、トイレ介助、マッサージ、食事介助である。施設に着いて行うのはまず洗濯である。マーシーと呼ばれるインド人のソーシャル・ワーカーが釜で熱した衣類やシーツをバケツで運び、マーシーが受け取り洗剤を含ませる。その後、六つの工程に沿って手洗いで汚れを落とし、すすぎ、絞る。この工程が終わると再度きつく絞り三階の屋上へと全て運ぶ。これらの作業におよそ二、三時間費やす。

洗濯の後は、施設内で収容されている患者さんのケアを行う。主に自らトイレに行けない人のトイレ介助である。他にもマッサージや爪切り、マニキュアを塗ったりもする。数時間ほどで食事の時間になるので、配膳の準備と食事の介助を行う。

#### ダヤ・ダン

この施設には十歳に満たない親のない子どもたちが収容されている。ハンディーキャップ（脳性麻痺、知的障害、体が不自由、結核）を持つ子どもが約五十人いる。中には生後四カ月の子どももいる。

ここでの活動は、子どもたちのベッドメイキング、衣類やシーツの洗濯、子どもたちのリハビリ、食事介助である。洗濯は、プレム・ダンと同様に行い、午前中は全て洗濯に充てる日もある。洗濯が早めに切り上げられた時は、子どものリハビリを行う。一人一人に

対してどのようなリハビリを行えばいいか記してある本があるので、それを見ながら行う。午後は食事介助、主に自ら食事を食べることが出来ない子どもの食事介助を行う。それが終わると子どもたちをベッドまで運び子どもたちの睡眠の時間となる。

### カリガート

この施設は日本語では「死を待つ人の家」と呼ばれる。貧しく、プレム・ダンよりも瀕死の状態の患者が収容されている。マザーテレサは路上またはスラムで死ぬことを待つしかならない人が安らかに死を迎えることのできる家を作りたいとして開設した。

ここでの活動は薬の支給、食事の配膳と介助、食器洗いである。

### ボランティアにおける苦勞

苦勞した点は、言語と食事介助であった。

言語は共通言語が無いため、初めの頃は意思疎通を図ることにとても苦勞した。プレム・ダンの初日、ある患者さんが何かを訴えて指で示していたが全くわからず、何も出来なかった。その後すぐに長くボランティアを行っている人がトイレに連れて行き、その時初めてトイレに行きたかったことがわかった。また、カリガートではある患者さんが、水がほぼいっぱいに入ったペットボトルを差し出してきた。キャップを開けたり閉めたりしていたが何を欲しているのか分からなかった。その後違うボランティアにも同じことをして、結果水を全ていっぱいにして欲しかったのだということが分かった。

初めの頃は意思疎通に戸惑っていたが、次第に周りの患者さんがトイレは指合図していることに気付いたり、こちらが日本語で話をしてもうなずいて聞いてくれたり、身振り手振りで指示をしてくれる患者さんもたくさんいることに気付けた。そのため、当初困惑していた共通言語が無いために意思疎通が上手く図れない状態は、周りをよく見ることで次第に改善できていった。

一方食事介助は、何ら改善策を見いだせないまま帰国してしまった。初日の日に、昨日プレム・ダンで食事を喉に詰まらせて亡くなった人がいる、ということを知り、食事介助に少し恐怖を感じていた。プレム・ダンでの食事介助は何事もなく出来たが、ダヤ・ダンでハンディーキャップのある男の子の食事介助に苦勞した。その子、ソニア君は寝たきりの状態で、言葉も話せず、自ら食事を取ることは不可能なため、食事介助にあたった。しかし、食事をあげても自分の力で嚙むことが出来ないため、顎を動かしたりしなければならなかった。そうしているうちに苦しそうな表情を浮かべ、眠ってしまった。シスターは早く！早く！と言うだけだった。近くにいた友人に手伝ってもらい二人で寝ているソニア君の口に食事を無理やり入れ、苦しそうな表情のまま、顎を動かして食事をあげ、終わった時にはキッチンルームで私たちだけ、という状況であった。翌日もその翌日もその繰り返しでソニア君には苦しい食事をさせていたと思うと心苦しい気持ちであった。結局食事介助はどうしても上手く出来ないまま帰国してしまった。

## ボランティアを終えて

二週間という短期間のボランティアを通して、日本では得ることの出来ない経験が出来た。ボランティア活動では戸惑うことも少なくなく、自己満足と言われればそれに過ぎず、今思えば患者さんに対し心無い対応をしたと思えることもある。マザーテレサはボランティアに対して「働きを通じて貧しい人々にどれほど多くの愛を与えたのかが大切なのです」と述べている。私は誠意を持って患者さんに接していたつもりではあったが、必ずしも相手がそう受け取ったとは限らないだろう。愛を与えられていたかどうかは定かではない。振り返れば反省すべきことが沢山ある。ゆえに、機会があればもう一度インドでボランティアを行うつもりである。

また、このボランティアやインドでの生活は、卒業論文執筆や、関連文献を読むにあたり活かすことができるだろう。以前であれば、インドの今後の課題は衛生環境の改善、インフラ設備の強化と文献に書いてあっても、実際それらがどのようなものか分からなかった。今は、衛生環境やインフラを実際に一部ではあるが見ることが出来たため、それらの重要性が切実なものとして理解できるようになった。しかし、こうした理解を深められても、個人で貧困という大きな問題に対処する力は無い。したがって、今まで気にかけていなかった団体や企業、国家レベルでできる支援についてより見識を深めたい。

最後に、このボランティアを通して様々な国の人々と親しくなれたことは非常に良い刺激となり、今後の英語学習へのモチベーションにも繋がった。というのも、英語でのコミュニケーションが図れないと仕事に支障が出たりしたからである。また、日本人は英語出来ないから嫌、とよく半分冗談で言われていたからである。もっと多くの人と英語で話せればと思うと残念で、今後のモチベーションに繋がり、刺激となった。